

## ◎特集 革命前後ロシア周辺諸国における歴史叙述◎

### 序

小澤 実

本特集は、二〇一三年六月二二日(土)一五時より、立教大学池袋キャンパス一四号館にて開催された二〇一三年度立教大学史学会大会シンポジウム「革命前後ロシア周辺諸国における歴史叙述」における討論の記録である。報告者による寄稿論文に先立ち、本シンポジウムの意図するところを記しておきたい。

一九一七年にロシアで二度にわたり生起した革命の結果として、ロマノフ朝ロシア帝国は終焉を迎え、世界初の社会主義国家であるソヴィエト連邦が誕生した。その後の歴史において、アメリカ合衆国とならぶ超大国となったこの連邦共和国は、政治・経済・国制・外交・文化など様々な側面においてその周辺諸国のあり方に大きな影響を与えてきた。激動期にあったロシア帝国そしてソヴィエト連邦に隣接し、まさにその成立前後の動向により大きな歴史的

展開を経験したフィンランド、オスマン帝国、日本において、国家としてのあり方がどのように問われていたのだろうか。本シンポジウムは、歴史叙述という観点から、二〇世紀史の一面を明らかにしようと試みであった。

その時々の時勢に規定される歴史の描き方である歴史叙述／史学史 (historiography) に対する関心は、近年世界の歴史学において急速に高まってきたように思われる。英語における成果を四点あげておこう。第一に、John Burrow, *A History of Histories: Epics, Chronicles, Romances & Inquiries from Herodotus & Thucydides to the 20th Century* (London: Penguin Books, 2007) による。本書は卓抜した思想史家による個人による歴史叙述の省察である。第二に、Daniel Woolf(ed.), *The Oxford History of Historical Writing*, 5 vols. (Oxford: Oxford UP, 2011-

特集 革命前後ロシア周辺諸国における歴史叙述（小澤）

2012)である。第一人者の寄稿により世界の歴史叙述を通覧した画期的な叢書である。第三に、ヨーロッパ学術財団が資金援助を認めたWriting the Nationという研究プロジェクトの一連の成果である。その成果として、近代ネイションの生成と歴史記述の関係を多角的に論じた同名シリーズの論集が現在六冊刊行されている。また論集に加えて、ヨーロッパ各国の歴史学の生成を視覚的に表現したIlaria Porcini & Lutz Raphael(ed.), *Atlas of European Historiography: The Making of A Profession, 1800-2005* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010)とこう画期的な「地図」も手に行うことができる。第四に、Daniel Woolf, *A Global History of History* (Cambridge: Cambridge UP, 2011)である。先に挙げたオックスフォード叢書の編者である著者が、世界における歴史叙述を有機的に関連させることで描き出した歴史叙述のグローバルヒストリーである。いずれの成果も日本で紹介されたと耳にしたことはないが、歴史学そのもののあり方を時間的空間的に大きなパースペクティブで批判的に回顧検討するためにも、いずれ翻訳などを通じて知られるようになって欲しいと思う。

以下三本の論考とコメントからなる。第一論考は、フインランド近代史家石野裕子（金沢大学先端科学・イノベ

ーション推進機構博士研究員）による「独立フィンランドにおける自国史の「創造」、第二論考は、オスマン帝国史家藤波伸嘉（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究機関研究員）による「ギリシア東方の歴史地理オスマン正教徒の小アジア・カフカース表象」、第三論考は、日本近代史家千葉功（学習院大学文学部教授）による「歴史と政治 南北朝正間問題を中心として」である。以上の論考に加え、長年にわたり世界史的観点からロシア近現代史を研究してきた石井規衛（立教大学文学部特任教授）が、全体に対するコメントを付す。

本特集も、先に述べた世界の史学史研究の潮流に倣すことを目的としている。ユーラシアの大国ロシアに隣接し、その影響を一定程度こうむる位置にあった国家という共通項を設けつつも、西洋史・東洋史・日本史という本邦の伝統的な分野区分を出自とする研究者に報告をお願いしたのは、今回のような試みが、いずれ分野の壁を越えるグローバルヒストリーの一角に根付くことを願うことである。本邦における近代歴史叙述／史学史の学術研究の祖、大久保利謙が教鞭を執った立教大学で、そして彼の属した立教大学史学会でこのような特集を用意できたことを喜ぶたい。

（本学文学部准教授）